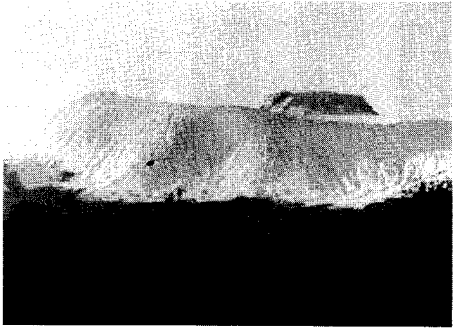


戻る

第二章

退院一年目の
試行錯誤



日常生活は自分でこなしたい

昭和六十一年三月十九日、札幌から横浜に引き揚げたが、さつそくその翌日、古くからの主治医、塩田先生をお訪ねして、診察を受けるかたわら、これからの指導をお願いした。

退院してきた私の目標は、社会復帰に向けて機能を回復することであったが、そのためには何よりもまず、日常生活を自分の力で処理できるところまで戻さなければならなかった。また、発病以来、ようやく夫婦水入らずの時間が持てるようになったと感謝しても、長い介護が続くと妻に重い負担がかかり、いつ共倒れになるかもしれないという不安もあった。少なくとも私が日常生活の中で独立しなければ、という思いが、私を機能回復に必死で取り組ませていた。

塩田先生は、「脳梗塞は、神経の回路がまたできるからいいが、心筋梗塞だったら大変だったよ。心筋梗塞では時限爆弾を抱えているようなものだ。しかし現状より悪くならないことを第一に考えることが大事だ」と私に療養の心構えを教えてくださった。そしてリハビリのためには、「命がけでリハビリに取り組んでいる友人を紹介しよう」と横浜市立大学病院リハビリ科の大川嗣雄先生を紹介してくださった。

退院当初の訓練状況

こうして退院後の健康管理には、この塩田先生を主治医とし、リハビリは大川先生のご指導を受けるといふ二本立てで、具体的な方針がきまった。

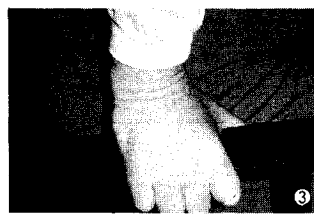
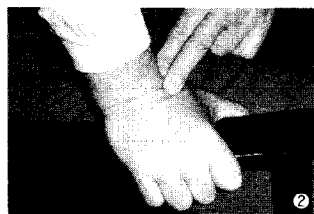
数日後、市立大学のリハビリ科で大川先生の診察を受けた。大川先生は私を診察した後、上肢の運動を次のように指導してくださった。

それは、朝昼晩の三回、それぞれ二十回ずつ、左手で右手の手首をしっかりと握って上に上げる運動である。目の高さくらいまで腕を上げると、もう激しい痛みが始まる。その近くの痛くない範囲まで十五回くらい上げてから、最後の五回くらいは少しの痛みを耐えて頭の上にまで上げて動かす運動だった。

初めはなんと簡単な運動かな、と思ったが、家に帰って実行してみると、大変なエネルギーが必要で、これを朝昼晩と継続するのは大仕事だということに初めて気がついた。

歩くトレーニングは、なだらかな坂道や雪の残ったアスファルト道を約三十分のサイクルで二回歩く。四月に入ってから毎日午前中に約一時間半、午後は約一時間の歩行訓練をした。毎日歩くコースがほとんど同じなので、ときどき自分の腕時計を見ながら変化を記録した。そうすると初めは三十分かかったところが、やがて十五分で歩けるようになり、また十分歩けば座り込んでいた私が、なんと一時間約二キロの田舎道を歩き通すことができるようになっていくのがわかった。このころはただ

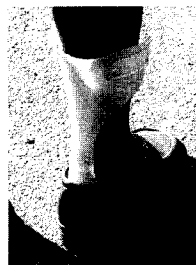
椅子の手すりで右手首関節を訓練する。①右手で椅子の手すりをつかむ。②手首がうまくかえられないので、左手の指を使って手首を立てる。③手すりをしっかりつかんで立ち上がる。



▼左手と右手をしっかり組み、目の高さまで上げる。初期は写真の位置までが精いっぱいだった。



▲リハビリの先生が考案された歩行用の装具。前面についていたゴムは除いて使う。ゴムがないほうが足の動きがよいことを発見した。



▲自分で考案した傾斜板を敷居などに置き、アキレス腱を伸ばす。

●初期によく行なったリハビリ

歩くことだけを考えていたので、左足に大きな負担をかけていたかもしれないが、それにしても歩けることが私の喜びであった。

次には、歩行の早さを時計で計るほかに、何歩かかったかと歩数も計った。近所の学校の前まで私の足で何歩かかったか、ということである。当然のことながら、これは私の歩幅が狭かった最初のうちは歩数は多く、次第に少なくなってきた。しかし、前より一割は減ったはずだと思いついてみると、なかなかうまくゆかないことも多かった。何が不足しているのかな、とひとり歩き方の工夫をする。

心配していた自宅の風呂は、手すりはないが、浴槽の周囲の壁に手をふれながら出入りすれば、問題なく利用できるかわかり、ほとんど不安を感じることもなかった。自力では動かない右腕は、入浴中に温めながら一生懸命動かす訓練をする。

あまりうまくないけれど自分で工夫してアキレス腱を伸ばすための傾斜板を作り、これでなんとか腱を伸ばせるようになった。

塩田先生のところでは、二週間に一度いろいろな検査と診察を受け、内服薬をいただくが、血圧は最高百二十から最低八十と安定し、血糖値は標準値に収まり、体重も七十四キロと管理基準の中に収まっていた。この調子を今後も維持しなければいけない。

大学病院には週一度出かけるが、大川先生は私に歩行用の装具を設計してくださいました。この装具はプラスチックの加工品だが、大川先生が新しく設計されたもので、専門業者が先生の意図がよくわか

らず、首をひねりながら製作したものだという。これはなかなか具合がよく、つま先が支えられるので、たいへん歩きやすくなった。大病院に行くときは、駅まで徒歩で二十分、横浜で乗り換え、階段を百段、さらに地下鉄を降りて階段六十段と十五分の徒歩、疲れるとタクシーで帰る。

ときには大病院の帰り道、山下公園に立ち寄り、妻と肩を寄せ合ってサンドイッチを食べ、しみじみと沖の外国船を眺めたりしたが、考えてみると、発病以来七カ月、「妻のいる風景」ばかり見てきた。結婚してからこんなに夫婦がいっしょにいるのは初めての経験である。

発病前の生活をふり返って

横浜での治療体制が整うと、なぜ、こんな病気になったかと考えるゆとりが生まれてきた。そして、この病気が私の体質と生活習慣から生まれたものだったなと、深く反省をしたものである。

記憶をたどると、私は小学校ですでに六十キロあり、太っていることあまり抵抗感を持っていなかった。中学の二年生では八十キロを突破し、身長も百七十六センチあった。そこに私が糖尿病になりやすい体質がつくられていたのだ。いちばん太っていたときには百キロを超えたことがあるが、さすがにこれは太りすぎだと自分でも注意して減量した。脳梗塞で入院したときは八十六キロだった。

血圧は一時は百五十くらいあったが、「君の体格ならこれくらいは普通だね」と言われて安心していった。献血をした後で、血液の成分を分析して「あなたの血は濃いですね」と言われたことがある。「それ、どんな意味があるんですか」「うーん、コレステロールがちよつと多いかな」と返事が返ってきた。

「なるほど、そうか、そんな程度の問題か、よかった」そのときはそれですんだ。

昭和五十六、七十七年ごろからは、石油ショックの対策を中心にして、仕事の上で私のストレスはふえ続け、神経性胃腸炎になっていた。朝、出勤前にトイレに行っても、自宅を出て三十分もすると激しい腹痛に襲われてくる。たまたまなくなり出勤途中の横浜や川崎のトイレに飛び込むことも多かった。会社にたどりつけば、真つすぐトイレに駆け込んだ。

同時に、タバコの種類も量もふえていた。普通の紙巻タバコでは飽き足らずに、パイプとか葉巻とか、紙巻でも強烈なゲルベゾルデなど刺激の強いものが好きになった。

最近、壁紙を張りかえた職人が、「だれがこんなにタバコを吸ったんですか。ホラ、こんなところまでタバコのやがついている」と、天井近くの壁を指さしていた。当然、家族からは反対コールが起き、娘からは、「私を肺がんにする気なの？」と苦情が申し込まれたが、「いや、紙巻タバコは肺がんの原因になるらしいが、パイプや葉巻はだいじょうぶだそうだよ」と私は無視し続けたのであった。

夜も遅くまでいろんな人と会う。神経が立ったまま帰宅すると、深夜「おーい、お茶づけ」と一杯の茶づけを食べ、「あーあ、くたびれた」と数杯の強いウイスキーをのどに流し込む。酔いがないと眠れなかったのである。

ゆっくりと眠る時間もつたなくて、「ナポレオン並みに四時間あれば平気だ」と言い、疲労が残ると、「食事でエネルギーの補充をしよう」と言っては食べる。太るための条件は私の生活習慣にしみついていたのだ。

そのかわり、出張に出ると、飛行機に乗ったとたんに眠り込む。どうかすると着陸してエプロンに停止するゴットンという衝撃で目を覚ましたことすらあった。新幹線で名古屋まで行くのに、「名古屋までは二時間だから一時間は眠ってもだいじょうぶ」と眠り込む。静岡付近で目が覚める。「静岡からは一時間あるから三十分」とまた眠り込む。こんな私は手足を伸ばして眠る睡眠の大事さに気がついていなかったのであった。

別名が「習慣病」といわれる脳梗塞の原因らしきものは、私の生活の中に満ち満ちていたのを発見したのである。私は妻に、

「俺って、ずいぶん無茶をしていたんだなあ、いつ死んでも不思議なかったんだなあ」

と言うと、うなずきながら、

「そうなの、いつ倒れるか、いつ病気をするか、そればかり心配していたの。あなたは自分のお仕事がおもしろくて死ぬのなら本望でしょうが、うちには娘が二人いますのよ」

と白い雲を見ながらポツンと言った。

「うちには娘が二人います」という言葉は、私の胸にグサリと突き刺さった。

思い返すと、昭和五十六年ごろの私は、血糖値が高く、塩田先生のご指導で減量して血糖値を下げることが成功していたのである。その指導を守って生活管理ができていれば、今回の発病は食い止められたかもしれないという後悔の念が残る。

仕事であるからストレスは当然である。問題は、起きたストレスをじょうずに処理して後に残さないことだろう。ストレスを解消するつもりでも、盛り場を遅くまで飲み歩くことも、新しい問題をつくる原因になっていたのかもしれないと反省する。食事のとり方もよくなかった。時間を感じながら慌てて食べたり、新聞や書類に目を走らせながら何を食べたのかも覚えないう食事だったり、夜遅い時間のラーメンなど「絶対に」よくなかった。太らないためには、食事の時間も注意しなければならぬのである。

そのとき妻は

再発は絶対に許されない…… それには食事の管理、体重の監視を厳重にしなければなりません。減量では今ままでずいぶん気をもんだこともありましたが、塩田先生も、「なぜ、あのかのときのままの体重が維持できなかったのか」と残念がっておっしゃったほどです。

北海道時代は、夫は夜の会食が多かったうえに、札幌には「うまいもの」がいっぱいですから、ずいぶんよくいただいたのではないのでしょうか。当時、夫は単身赴任ではありませんが、私が横浜の家と札幌を往き来して、留守にすることもたびたびありました。そのために、「外食が多かったのが、いけなかったのかしら」と思わないでもありませんが、朝早くから夜遅く

まで外にいる夫は「野放し」にせざるをえなかったのです。帰宅すると、寝酒にウイスキーをダブル二杯くらいは常でしたから、これだけでもカロリーオーバーです。

退院時、体重は七十二キロに減っていましたが、運動量がふえてきましたら、少し疲れやすくなり、かぜがなかなか治らないなどの症状が出ました。現在は七十四キロ前後に維持して順調です。標準体重より少し太めですが、元気に動ける範囲のほうが良いのではないのでしょうか。やっと私の思いがかないました。これはどうしても守ってもらわなくては……

食事のとき「これをどうぞ」と言うのはやさしいけれど、「これはだめ、これ以上は多すぎる」と言うのは、とてもむずかしいものです。そこで、きつちりと量を計って食卓に並べます。正確に計っていると、大体一週間で目分量でもわかるようになるものです。でもときは正確に計ってみないと、ついつい甘くなりがちで、たちまち体重に表われます。体重は、減量を始めても大体一週間くらいは減ってこないのが普通ですから、ここであきらめないことが大切です。本人が自分で管理するしかないのですが、調理のほうも協力しないといけません。

外食のときはご飯で調節するのがやりやすいのですが、外食があらかじ

めわかっているときは、朝食も、そのつもりでカロリーを低めにし、帰ってきての夕食も、湯豆腐などに、菜類とか海藻類をたっぷり入れた献立にします。よくそんなときに、朝食抜きとする方もあるようですが、これはかえってよくないので、紅茶とトマト、または果物少々に、六枚切り半分のトーストという軽いものをいただきます。トーストはバター、ジャムをつけず、パリッと焼いたもの、紅茶はローファット牛乳を入れて、砂糖は使いません。

発病前のことですが、「おいしいご馳走は少し食べればいいのに」と私が言ったとき、「食べないと出るものも出ないよ」と主人の切実な返事が返ってきたことがあります。確かに便秘はつらいことですが、便秘をしないために、たくさん食べるなんて、大きな間違いだったわけです。

便秘は肥満にもつながるので、便秘対策もしなければなりません。便秘予防には食事面だけでなく、運動も大切な要素なのですが、体が不自由ですから、どうしても運動量は不足がちになります。そこで私は食事に気をつけるように心がけています。それには繊維質の多い献立にしています。

根菜類は繊維質が多い食品の一つですが、お煮しめにすると、砂糖が欲しくなります。でも「だし」を濃くすると、砂糖抜きでもおいしく食べられ

ることがわかりました。わかめ、こんぶ、ひじきなどの海藻類、こんにゃく、きのこなどは繊維質が多く、低カロリーなので、よく利用します。そのとき油は植物油にし、量もぐっと控えます。そのほか、血圧のことも考えて、できるだけ薄味にします。そのときには香辛料や酢などが役に立ちます。

杖を持たずに歩けた

四月の中旬になって、出先でとうとう雨に降られた。退院するときにはいちばん心配したのは雨の日の外出で、それは左手に杖を持つと傘が持てないからである。しかし、その日は急に降られたので、背に腹は替えられず、思い切って傘をさしてみた。するとどうだろう、うまく傘をさして杖を持たずに歩けるではないか。すっかりうれしくなり傘をかざして歩いた。その日から杖は必需品ではなくなったのだ。毎日の訓練は小さくても、着実に努力することによって成果は目に見えるようになる。

私にとって、冒された大脳の神経細胞が運動領域だったということはありがたいことだった。精神的な働きを司る神経は冒されていないわけだから、昔の水準に戻すことはできるはずである。そこで、指先を刺激することは大脳の活性化につながると考えていたので、まず、左手でワープロのキーボー

ドを操作することを、毎日実行することにした。

さらに、外から受け入れたいいろいろな情報を、頭の中で整理し、私の考えに直して表現する訓練がある。具体的には、手紙、随筆、旅行記を書くこととした。特に旅行は新しい環境と未知の問題に対処する能力が求められるので、リハビリの応用問題としては積極的に取り組みたい。列車や船の中で安全を確保する工夫、メモがとれない私が旅行中の印象を自宅のワープロの前に持ち込む努力。これらは大脳を活性化するすばらしい手段となるだろう。

私の言語障害が、ひどいものではなかったことを神仏に感謝して、生き残った神経細胞を総動員して早く機能を回復し、社会復帰をしたいと願う日々であった。

退院後初めて旅をする

義理の妹夫婦が鳥取に勤務していた。九月、「そろそろ転勤になるから、今の内に一度こないか」との誘いを受け、退院後初めての旅をする事になった。しかも、山陰は私にとって初めての土地であった。

手足の機能が低下した私が、「旅行」という行動をどの程度、自由にできるか、はなはだ疑問であった。この旅で肉体的には機能の回復と行動の限界を知り、精神的には初めての土地にどれくらい興味を持てるか、外部の刺激を自分の表現能力で書けるかを知りたいと思った。

京都までの新幹線では、揺れる車内でトイレに行くとき、バランスをとるのに苦労した。椅子の背

もたれをつかみながら一歩一歩と通路を行く。手が滑って乗客にふれたりすると、あわてて「ごめんなさい」とお詫びをする。しかし、なんとか進行中の列車内を歩くことができたことが、まず私に旅行の自信を与えてくれた。京都駅では、新幹線ホームから山陰線ホームまでの連絡通路が長くて遠いには辟易したが、それでも雨の中を杖を突かず、ようやく山陰線の急行に乗り込むことができた。

第一日目の宿舎、因幡岩井の簡易保険センターは眺めもよく、ゆったりとしたいい温泉だった。洗いやつと浴槽にたどりつく。この浴槽には入浴用の手すりはなかった。手すりがなくても手をつける壁があれば、壁を伝って入浴できるのだが、ここには頼みの壁がなくて、出窓になっていた。いろいろと工夫してみたがうまくいかない。一日がかりで温泉に来て、温泉に入れなかったなんて、笑い話にもならない。浴槽の縁からあふれ出る温かいお湯の中に座って考え込んでしまった。

「あつ、そうか」ようやくよい方法が浮かんだ。ゆっくりと浴槽の縁にいざり寄り、座り込んだまま、マヒの足を手で抱えて浴槽の中に入れ、次に手で体を支えながらよいほうの足を入れた。浴槽から出るときは、浴槽の縁に腰をかけて、手でマヒの足を抱えて出し、次によい足を出す。その上で、左手を使って立ち上がる。こうして難関を突破し、無事に温泉を楽しむことができたのである。

妹の案内で宇倍神社にお参りし、私が一人前に歩けるようにとお願ひして、わらじをかたどったお守りを買った。なぜか、この神様は足の神様なのである。美しい砂丘や海岸線があると車から降り、必ず歩いてみた。砂丘の砂は思ったよりもしまっており、歩きやすかったが、やはり遠くまででは行け

なかった。

帰る日は米子まで列車で行き、大山をせひ見て帰ろうと思ったが、低気圧の通過とかで、その姿は見えなかった。残念に思いながら米子から空港に行くバスに乗り込む。ところが、空港でバスから降り、周囲を見渡した私は思わず息をのんでしまった。ようやく晴れた入り江を挟んで、その彼方に大山の秀麗な姿が見えるではないか。海岸に山裾がなだらかに落ち込み、その上を白い雲が山を取り巻く様は、ちょうど昔の女性が入浴するとき、恥ずかしげに腰回りに布を当てた姿をほうふつとさせる。

古代の海洋航海の民は、対馬暖流の流れに船を乗せ、東の彼方に目を凝らしたのであろう。この山の頂がまだ見えないか、と懸命に探してようやくこの山の姿を見つけて、航海の安全を神に感謝したに違いない。私も神に感謝しつつ、予想外の成果を上げたこの旅を終えたのである。

退院一年後のうれしい「事件」

まだ札幌の中村記念病院に入院していたころ、「十三階サミット」と称して、同病の仲間が集まり、会話の訓練を続けていたことがある。ほとんどの人が発音機能を損なわれていたが、同病の気安さで、みんな、よく話し合ったものである。また、それぞれの体験やリハビリの工夫を披露し合うこともあり、当時の私にとっては貴重な情報収集の場でもあった。そのとき、だれ言うことなく、

「退院してもみんなが集まれる会があるといいね」

「それでは院長に協力を頼むか」

こんな話が進んだ。私が退院した後、ようやくこの計画が実を結び、「中村友の会」が設立された。

第二回の総会が、退院半年後の十月、支笏湖畔の旅館で開かれることになり、山陰から帰るとすぐ、私も駆けつけた。そこで私は障害を持つ仲間と久しぶりに接し、すばらしい体験をすることができたのである。それは一言で言えば「自発性の大切さ」ということであつた。例えば、退院後は通院はしていても、同病の人と頻繁に接することはなく、家族に「保護された生活を送っていたわけで、仲間の中に入って目を開かれたのである。「自発性のすばらしさ」を体験し、感動したのであつた。

十三カ月ぶりに歌を歌う

「中村友の会」にはたくさんの顔なじみがそろつた。お世話になつた院長も出席され、万一の事故に備えて医師や看護婦さんの救急医療体制も整えられていた。ここまで大変なご努力をくださった院長に、私は真っ先にお礼を申し上げた。

夜の余興では室内ゲートボールが準備されていた。だれしもボールをたたいて動かすという単純な遊びが好きなのである。私とそのボール遊びに夢中になった瞬間、マヒで物が握れなかつた手が、スティックを握りしめ、拘縮して曲がついていた腕が、ちょうどゴルフのクラブを握ると同じような形になっているのを発見して、飛び上がるほど驚いた。

「なぜ？」

しかも、私ひとりが機能回復の「奇跡」を体験したのではなく、他の方もゲームに夢中になつたとたんに、大事な杖がじやまになつて杖なしで歩き始めたりした。

人が自発的に行動するときには「リハビリ行動に思いもよらぬ力が出る」ことは、私の予想しなかつたすばらしい体験だつた。

ゲートボールに続いて、仲間が歌うので、私も歌つた。じょうずへたは別にして、人の前で声を出して歌うことが大事だと思ひ、歌になつていなかつたかもしれないが、大きな声を出して歌つた。私が歌つたのは、発病して以来、実に十三カ月ぶりのこと、脳梗塞にかかつてから初めての経験だつた。

おかげで舌の一部に残っていたヒキツリの感じが薄くなり、うれしいことだった。

私はこの会場で、流暢ではないながら、同じ仲間同士の遠慮のなさに次々に話ができ、帰宅後は「発音がずいぶん乱れなくなった」と家族にほめられた（実は、これはまだ本格的な回復ではなく、「しゃべる、歌う」がスムーズにできるようになるには、さらに時間と訓練が必要ではあったのだが）。

このような個人的体験を通じて、私と同じ肉体的、精神的苦痛と闘っている皆さんに、ぜひこの会員になってもらい、互いに励ましながらいっしょにリハビリをしていければ素晴らしいという思いを強くしたのである。

好きこそもののじょうずなれ

これはリハビリに取り組む私のモットーとしていた言葉である。

人間は、好きなことであれば多少の苦痛が伴ってもやってみようが、反対に日ごろから嫌いなことだと拒絶反応を起こしてしまう。好きなことをしながら手足の機能不足を補う方法を見つかったり、筋肉の訓練に結びついたりすると抵抗が少ない。だから友人には、ぜひ自分の趣味を続けなさいと申し上げているのである。それがリハビリ活動の一助になると信じているからだ。

しかし、片マヒの後遺症を持っている身では、「何が好きか」と質問されても、それは「自分が昔からやっていたもの」に絞られてくる。私にとっては、カメラがそれだった。父が古いガラス乾板式のカメラで家族を撮っていたし、私も学生時代からカメラに親しんでいたために、これまでもいろいろ

なカメラを使っては壊してきた。それが北海道という、魅力ある大自然の中で仕事をする機会に恵まれ、私のカメラ熱は一気に上昇した。それともう一つ、昭和四十年代の前半に勤務していた鈴鹿の工場時代に手ほどきを受けた「ゴルフ」が好きなのと言えらるだろう。

写真とのつきあいは古いが、札幌に来て、写真とは自然の「光の美しさ」を捕まえる芸術だと知ったことから、初めて私の趣味にまで高まったと言っている。病気になるってカメラを手取ることもできなかった私のために、エンジニアリング時代の友人が、優れた写真集を病室に持ち込んでくれたこともあった。私はそのすばらしい写真を眺めては、いろいろと想像を働かせたものであった。

左手だけで写真が撮れた！

それはさておき、「中村友の会」では、歌が歌えたほかに、もう一つ忘れられないでき事が起こったのである。実は私はそのときなぜかカメラを持って出かけていた。

古い友人と励まし合い、支笏湖温泉での楽しい一夜を過ごして朝を迎えた私は、旅館の窓から見える風景に、思わず息をのんだ。支笏湖を挟んだ対岸にある樽前山の頂には昨夜のうちに新雪が降り積もり、純白のペールで覆われていた。いま昇った透明な朝の光が、その新雪をキラキラと輝かせて、麓の支笏湖岸には、ななかまどの紅葉が真っ赤に燃えていた。北海道に勤務していた五年の間、夢にまで見ていた光景が、私の目の前にあったのである。当時、こんな光を撮りたくて札幌から出かけてきても、気むずかしい天の女神様はすぐ空を曇らせてしまい、狙っても狙っても撮影が許されなかつ

たものだった。

私は夢中になってカメラをバッグから取り出してはみたが、どうしてよいのかわからない。カメラを左手で支えると、シャッターを押すべき手が今の私にはないのだ。手が欲しい、シャッターを押す手が欲しい、天候が変われば二度と許されない機会なのだ。私は必死になって祈った。

突然私は、カメラを天地逆にしてみた。ひっくり返したのである。カメラのシャッターはどれも右手の位置にあるので、カメラの天地を逆にする、シャッターの位置が左に移り、カメラを持つ左手の指でシャッターを同時に操作できるではないか。

狂喜した私は夢中になってシャッターを押した。成功だ。片マヒの私でも工夫すればシャッターが押せたのだ。

六十二年の秋には、初めての写真集『愛しの大地』を自費出版したのだが、この写真集には、この日、私がカメラを逆さにして写した「新雪の樽前山」をのせた。

この小さな挑戦の成功は、私に新しい目標を見つけさせた。それは将来「湘南・横浜風景」の作品展ができるような写真を撮りためること、右手の機能ももっとよくなると思うので、少しでもレンズ交換やアクセサリの使用ができるように右手を訓練すること、三脚を積極的に使用した風景を狙うことなどであった。

この二年後には、写真個展を開くこともできたのだが、すべての出発は、支笏湖でのカメラ逆さ事件だったのだ。忘れられない事件である。

そのとき妻は

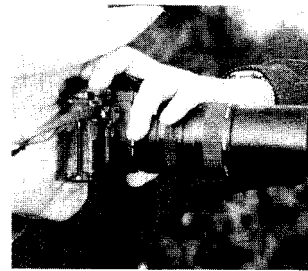
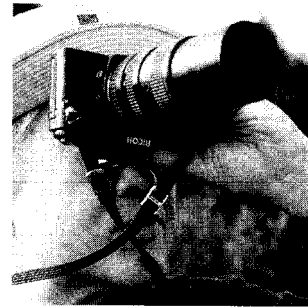
第二回の中村友の会が支笏湖であったとき、久しぶりにお目にかかった方々は、今はそれぞれ家庭に戻って療養していらっしゃいました。

その中に私よりも早く退院なさった方なのに、そのころのお元氣な面影も消え失せて、やっと歩いていらつしやる姿を目にしました。お年も夫より上の方でしたが、ご家族の皆さまが、実に手を尽くし看護していらつしやるのを覚えていましたので驚きました。

私どもなど、最初の計画とは違って、家には夫のために改造した場所など、どこにもなく、不便はがまんしてもらって、ただスリッパを廃止したり、マットをのけたり、ソファなどの応接セットをやめて大きな木のテーブルと肘掛けのついた椅子に変えただけ。訓練の道具も夫が考えるままの有り合わせ、「それがよかった」と言われれば恥ずかしい限りです。

友の会の翌日、私は三脚をかついで、重たいと文句を言いながらも、紅葉の美しい湖畔の景色に見とれて、夫とはずいぶん離れてしまいました。

足の遅い夫は後から来ながら、折しもさしかかった朝の光が、初冠雪の樽前山に美しく輝くのを見つけて、思わず逆手手法で写真を撮ったのでした。他の三脚を据えて撮ったどの写真よりも見事だったのは、皮肉な成果でした。「弱すれば通ず」というのでしょうか。どうしても欲しいワンショットだったのでしよう。現像してこの写真を見たときの驚きは今でも忘れられません。



カメラを逆さにして左手で持ち、左手でシャッターを押して、初めて撮影ができるように(上)。やがて、長いレンズをつけ、カメラを逆さにせず、左手だけで操作できるようになった(下)。

戻る